

青年期の価値観に関する研究

—— 自我同一性地位との関連 ——

井 上 知 子・三 川 俊 樹・芳 田 茂 樹*

A Study of Values in Adolescence

—— The Relation to Ego-Identity Status ——

Tomoko INOUE, Tosiki MIKAWA and Shigeki YOSHIDA*

I. 問 題 と 目 的

青年期における人格形成および精神的健康について、1989年以来行ってきた我々の一連の研究（井上他 1989, 1990, 1993; 三川他 1989, 1990, 1991; 芳田他 1993）の結果から、自我同一性の測定については実証的に捉えるために、自我同一性地位の視点から操作的に定義をおこない作成された尺度が有効であることが、十分に立証されてきた。さらに、性役割尺度については、1989年に作成した尺度について、その後、被検者層を拡大して行った役割受容・充実感等の青年期における生活意識を含む人格形成の諸側面との関連についての検討、および収集された性役割に関する資料の多変量解析的な分析による1990年の再検討の結果に基づいて、1993年に新たな性役割尺度の作成を行った。

今までに作成された自我同一性地位尺度は、職業、価値（人生観）、学業の3領域から構成されており、それぞれの領域について探索と傾倒の二つの側面から、自我同一性の発達「達成」「モラトリアム」「早期完了」「拡散」のいずれの地位にあるかを決定することを意図して構成されている。この自我同一性地位尺度と1989年版の性役割尺度との関連から、精神的健康について検討した結果（1991）は、要約すると以下の通りであった。

職業領域における自我同一性地位には、典型的な性役割が深く関係しており、「早期完了型」の男子は、いわゆる伝統的な男性役割を獲得しているのに対して、「拡散」の男子は、伝統的な女性役割をより多く獲得しており、男性役割が受容されていなかった。

* 大手前女子短期大学講師，本学心理学科非常勤講師

価値領域についても、職業領域とほぼ同じような傾向がみられ、伝統的な性役割については、「達成」および「早期完了」型が大きな関わりをもっていることが明らかになった。

学業領域については、性役割同一性獲得の程度とあまり関連が見いだせなかった。

1993年版の性役割尺度は、男性用と女性用とが別個に構成されており、それぞれ3下位尺度から成る（統合的男性性、行動的男性性、態度関心の男性性および統合的女性性、行動的女性性、態度関心的女性性）。統合的男性性および統合的女性性は、かつて Bem, S. L. (1974) が提唱した心理的両性性の概念定義に対して、測定尺度としての操作的手順における矛盾を解決すべく構成した側面であり、行動的性役割と態度関心的性役割は従来からの伝統的な性役割の側面を意味するものである。1989年版の尺度との違いは、前者が「男性統合性」「男性典型性」「女性統合性」「女性典型性」の4下位尺度から構成されていたのに対して、新尺度は、各3下位尺度により構成されていること、さらに、1989年版は男女に共通の尺度として作成されたのに対して、新尺度は男女に別個に使用される尺度として作成されたことである。また、前尺度における項目分析で見られた欠点も改善されている。

さて、現代の青年研究においては、青年の持つ価値観についてさまざまな問題が提起されるようになった。例えば、現代の世界情勢の変化にともなって青年の行動様式の変化の根底に何らかの一貫してみられる価値観がもたれているのか、それとも青年はすでにかつて見られたような青年らしい価値観を喪失しているのではないかという疑問は、その典型的なものである。そこで、われわれは『現代青年の行動様式と価値観』について研究すべくプロジェクトを組み、その中のメンバーとして“新価値観尺度”の作成に携わった(1993:1994)。新しく作成された価値観尺度は、特性論的な立場で各個人のもつ価値観を測定することを目指して作られた尺度であり、10下位尺度から構成されている。それら10下位尺度は、自己成長性、経済的安定性、自立性、身体的活動、対人志向性、愛他性、社会的評価、家庭生活、学歴尊重、健康性である。この尺度を使用して、現在、高校生、短大生、専門学校生、4年制大学生、勤労青年(25歳まで)を対象に調査を行い、現代青年の価値観についての検討を行っているが、十分な分析は今の感強い。

さらに、この価値観尺度についても未だ完成したばかりの段階であって、現代青年の価値観をとらえるのに真に有効な尺度といえるかどうかについては、尺度の信頼性(内的安定性)および因子的妥当性は保証されているが、併存的妥当性、構成概念妥当性等については、十分に検討されたとは言いがたいのが現状である。

研究の主目的であった「現代青年について、その価値観は如何なるものか、また、生活意識や行動様式にどのように反映されているのか」については、新価値観尺度の構成によってその緒に立ったところである。

そこで、本研究においては、まず、1993年度から行ってきた現代青年の価値観について、

青年の自我同一性地位とどのような関連を持っているかについて検討することにより、単に尺度の妥当性を検討するだけではなく、現代青年の価値観が青年の人格形成にいかなる機能を果たしているのかについて考察することを目的とする。なお、新たに作成された性役割尺度を使用しての価値観および自我同一性地位と性役割との関係については稿を改めて検討することとする。

Ⅱ. 方 法

(1) 調査用紙

本研究で使用した調査用紙は、自我同一性地位尺度、価値観尺度の2部である。

① 自我同一性地位尺度

対象者の自我同一性の達成状況を測定するために、三川、井上、芳田(1989)が開発した質問紙法による自我同一性地位尺度を使用した。この尺度は、現代青年の現状を考慮して、青年の自我同一性の達成状況について、職業、価値、学業の3領域における「探索」と「傾倒」の程度を合計48項目で測定するように意図して作成されている。それぞれの尺度は、各8項目の記述文がどの程度自分に当てはまるかについて、「非常によく当てはまる」から「ほとんど当てはまらない」までの5段階で自己評定させるようになっている。得点は、「探索」「傾倒」それぞれについて、探索および傾倒を表す方向から5点から1点を与え、8項目の合計点により表示する。自我同一性地位の決定は、各領域ごとに「探索」と「傾倒」の得点の組み合わせによって、Marcia, J. E. (1966, 1993)の提唱した、「達成」「モラトリアム」「早期完了」「拡散」の4地位に分類することができるよう工夫されている。

② 価値観尺度

青年の価値観を測定するための尺度は、1992年から1993年にかけて、現在までの主要な価値観研究についての文献的な検討を行った結果(井上、三川、芳田 1993)に基づいて、10尺度各10項目計100項目の予備尺度を作成し、700名の被検者(男子368名、女子332名)を対象に予備調査を行った。その資料を基に項目分析および多変量解析を行った結果、10尺度各4項目計40項目から成る新価値観尺度が作成された。10尺度とは、自己成長性、経済的安定性、自立性、身体的活動、対人志向性、愛他性、社会的評価、家庭生活、学歴尊重、健康性である。この新尺度についての内的一貫性は、 α 係数が.72から.90であり、項目数が少ないことを考え合わせるなら、信頼性は十分に保証されていると言える。また、40項目について主因子法、バリマックス回転により因子分析をおこなったところ、固有値が1.0を越える因子が9因子抽出され、いずれの項目も各因子に.60以上の高い負荷を示しており、きわめて明快で単純な因子構造であることが判明した。自己成長性と自立性は、作成時から1つの因子であるものをあ

えて2つの尺度として構成したため、極めて密接な関連があるものの、それ以外の尺度は比較的独立した内容であるといえる。教示は被検者にとって各項目の内容がどのくらい重要なことと思うかについて、「非常に重要である」から「まったく重要でない」までの6段階で自己評定させた。各尺度得点は、各項目に対して「非常に重要である」と回答した方向から6点から1点までを与えて得点化を行い、4項目の合計点を尺度得点とした。

この10下位尺度について尺度間相関をピアソンの相関係数で算出し、主因子法により因子分析を行いバリマックス回転により、3因子が抽出された。第1因子は、対人志向性、身体的活動に.75を越える負荷を示し、これに愛他性、健康性、家庭生活が加わった構成となっている。これらの尺度の内容から、この因子は、「対人関係」と「運動・健康」に関わる因子であると言える。第2因子は、「学歴尊重」にもっとも高い負荷を示し、「経済的安定性」「社会的評価」が加わっている。さらに、因子負荷量は比較的低いが「家庭生活」もこの因子に寄与していた。そこで、第2因子は高学歴、経済的な豊かさ、安定した家庭生活などに関連する「社会的評価」を表す因子である。第3因子は、「自立性」「自己成長性」の2尺度から構成され、「人間的成長」を表す因子であると言える。

(2) 調査対象および調査実施

本調査は、1994年4月から7月にかけて行った。調査の対象には、大阪府を中心に和歌山県など近畿の国公私立の4年制大学の1年次生から4年次生までの男女大学生が含まれている(表1)。被検者の所属学部、専攻は問わなかった。なお、調査票のフェイスシートには、性別、学年の記入を求めた。調査は、一部個別配布し後日留置法により回収したものも含まれるが、大部分は集団一斉調査法により実施した。脱落等不備な調査票を削除し、分析に使用した有効な被検者数は、表1に示したように、男子491名、女子572名合計1063名であった。

表1 被検者数

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
男子	365	67	47	12	491
女子	285	158	103	26	572

Ⅲ. 結果と考察

(1) 価値観尺度の結果

価値観尺度について、男女別に各尺度毎に平均値とSDを算出しt検定により性差について

検討した結果を、表1に示した。各尺度得点は24点から6点までの得点範囲内にプロットされることから考えると、男女ともに価値観の中で自己成長性、自立性、健康性は重要と考えられており、学歴尊重は比較的重要とはみなされていない。この結果から、尺度間の平均値について数値による直接的比較は不可能であるが、一般的には人間的成長に関する価値観の重要性が高く見られているものと言える。

また、この結果において、IV. 身体的活動に関して、男子の平均値 17.26 で女子の 16.52 に比較して 0.1% 水準で有意に高く、IX. 学歴尊重では、逆に女子の方が平均値 12.37 と男子の 12.19 に比べ 5% 水準で有意に高かった。1993 年に行った結果では、II. 経済的安定性とIV. 身体的活動について大学生男子の方が女子より有意に高いという結果が示されており、被検者の違いにより若干の性差は見られるが、どのような価値観を重視するかということについて一貫した性差はみられないというのが、今までの結果からいえるのではないかと思われる。

(2) 自我同一性地位の結果

自我同一性地位尺度についての男女別の平均値、SD および性差についての結果が表2に示

表2 大学生の価値観・自我同一性地位・性役割の性差

下 位 尺 度 名	男子 (N= 491)		女子 (N= 572)		t 値
	M	SD	M	SD	
価値観尺度	1. 自己成長性	20.68 (2.60)	20.96 (2.28)		1.81
	2. 経済的安定性	17.55 (3.96)	17.42 (3.16)		0.59
	3. 自立性	19.85 (2.66)	20.07 (2.27)		1.48
	4. 身体的活動	17.26 (3.58)	16.52 (3.26)		3.48 ***
	5. 対人志向性	18.17 (3.33)	17.95 (2.94)		1.10
	6. 愛他性	16.36 (4.02)	16.74 (3.32)		1.68
	7. 社会的評価	15.80 (4.28)	15.83 (3.23)		0.10
	8. 家庭生活	16.19 (4.72)	16.19 (4.59)		0.00
	9. 学歴尊重	12.19 (4.52)	12.87 (3.90)		2.60 *
	10. 健康性	20.12 (3.47)	20.09 (3.17)		0.14
自我同一性 地位尺度	1. 職業領域・探索	27.61 (6.87)	30.35 (5.56)		7.06 ***
	2. 職業領域・傾倒	22.18 (6.80)	23.58 (6.29)		3.47 ***
	3. 価値領域・探索	27.99 (6.94)	28.59 (6.15)		1.47
	4. 価値領域・傾倒	21.94 (6.71)	22.07 (5.88)		0.33
	5. 学業領域・探索	24.55 (6.02)	27.12 (5.26)		7.34 ***
	6. 学業領域・傾倒	26.88 (6.40)	29.61 (5.46)		7.42 ***

*** : $p < .001$ * : $p < .05$

されている。この結果から、職業領域、価値領域、学業領域の探索、傾倒ともに、女子の平均値の方が、男子のそれより数値的には高く、特に職業領域と学業領域については、探索、傾倒ともに統計的に有意な差が見いだされた。価値領域の項目内容はいわゆる人生観に対応するものであり、価値観尺度の結果においてほとんど性差が見られなかったこととも一致した結果である。職業領域および学業領域について、探索・傾倒とも女子の方が高い平均値を示したのは、4年制の大学への受験選択時に、女子は一応卒業後の進路等も考慮した上で受験するのが現状であり、就職が4年制大学の女子にとって非常に困難な現在の社会状況においては、特にその状況の反映した結果であることも十分に考えられる。特に女子の被検者に教員養成の教育学部あるいは心理学専攻というかなり専門性の高い学科が含まれていたことも、関係しているものと思われる。

表3および4は、男女別に自我同一性地位の3領域の探索・傾倒間の相関について検討した結果である。この表に示されているように、男女ともに、すべての組み合わせにおいて、統計的に有意な相関が見られた。換言すれば、男女ともに、職業領域、価値領域、学業領域の探索、

表3 自我同一性下位尺度間の関係(男子大学生 N = 491)

		職業領域		価値領域		学業領域	
		探索	傾倒	探索	傾倒	探索	傾倒
職業領域	探索						
	傾倒	.486 **					
価値領域	探索	.609 **	.212 **				
	傾倒	.296 **	.598 **	.136 **			
学業領域	探索	.459 **	.210 **	.382 **	.169 **		
	傾倒	.270 **	.297 **	.221 **	.266 **	.480 **	

** : $p < .01$ * : $p < .05$

表4 自我同一性下位尺度間の関係(女子大学生 N = 572)

		職業領域		価値領域		学業領域	
		探索	傾倒	探索	傾倒	探索	傾倒
職業領域	探索						
	傾倒	.488 **					
価値領域	探索	.458 **	.132 **				
	傾倒	.239 **	.497 **	.213 **			
学業領域	探索	.445 **	.199 **	.346 **	.157 **		
	傾倒	.307 **	.355 **	.233 **	.332 **	.400 **	

** : $p < .01$ * : $p < .05$

表 5 各自我同一性地位およびその決定 (男子大学生 N = 491)

		探索尺度得点	傾倒尺度得点	人 数
職業領域	達 成	28 以上	23 以上	153
	モラトリアム	28 以上	22 以下	112
	早 期 完 了	27 以下	23 以上	51
	拡 散	27 以下	22 以下	175
価値領域	達 成	28 以上	22 以上	141
	モラトリアム	28 以上	21 以下	268
	早 期 完 了	27 以下	22 以上	95
	拡 散	27 以下	21 以下	219
学業領域	達 成	25 以上	27 以上	184
	モラトリアム	25 以上	26 以下	76
	早 期 完 了	24 以下	27 以上	91
	拡 散	24 以下	26 以下	229

表 6 各自我同一性地位およびその決定 (女子大学生 N = 572)

		探索尺度得点	傾倒尺度得点	人 数
職業領域	達 成	31 以上	24 以上	191
	モラトリアム	31 以上	23 以下	104
	早 期 完 了	30 以下	24 以上	86
	拡 散	30 以下	23 以下	191
価値領域	達 成	29 以上	23 以上	144
	モラトリアム	29 以上	22 以下	157
	早 期 完 了	28 以下	23 以上	82
	拡 散	28 以下	22 以下	269
学業領域	達 成	28 以上	30 以上	177
	モラトリアム	28 以上	29 以下	273
	早 期 完 了	27 以下	30 以上	115
	拡 散	27 以下	29 以下	295

傾倒ともにそれぞれを関係づけながら自我同一性の確立を行っている途上であり、3領域が別個に達成されるのではなくて、相補的に確立されていくものであると言える。

本研究では、各被検者の自我同一性の達成状況についての4類型すなわち「達成」「モラトリアム」「早期完了」「拡散」を決定するために、平均値による方法を採用した。この決定方法には、平均値による方法、メディアンによる方法その他が考えられる。しかし、平均値による方法とメディアンによる方法で分類基準を作り、2つの方法によって各被検者の同一性地位を

決定し、両方法による差を検討した結果あまり相違が見られなかったので、ここでは1990年の研究においても採用した各尺度の平均値を基準値として、各被検者を各個人の得点に基づいて、4つの自我同一性地位のいずれかに分類をした。すなわち、表5と6にその結果を示したように、各領域ともに、「探索」「傾倒」とともに基準値以上の群を「達成」とし、「傾倒」は基準値以下であるのに「探索」は基準値以上の群を「モラトリアム」とした。また、「傾倒」は基準値以上で「探索」が基準値以下の場合を「早期完了」、「傾倒」「探索」とともに基準値以下の群を「拡散」とした。表5、6に、各領域における各地位の人数が示されている。人数比を見ると男子の「価値領域」を除いては、男女ともに、いずれの領域においても、「拡散」がもっとも大きく「早期完了」がもっとも少ない。これは、大学生という青年期後期に属する年齢層であるとはいえ、被検者の大半が1年次生であったため自我同一性の確立いまだしの感が強く示されている。

(3) 価値観と自我同一性との関係

価値観と自我同一性との関係について検討するため、両尺度の下位尺度間相関をピアソンの相関係数により算出した結果が、表7、8である。

男子学生においては、自我同一性の3領域の「探索」「傾倒」いずれとも、価値観の下位尺度のⅠ.自己成長性、Ⅲ.自立性、Ⅵ.愛他性と統計的に有意な正の相関が見られた。職業領域の「探索」は、Ⅱ.経済的安定性と負の相関が、Ⅳ.身体的活動、Ⅴ.対人志向性、Ⅶ.社会的評

表7 価値観と自我同一性との関係（男子大学生 N = 491）

価値観尺度	自我同一性尺度					
	職業領域		価値領域		学業領域	
	探索	傾倒	探索	傾倒	探索	傾倒
1. 自己成長性	.353 **	.149 **	.410 **	.163 **	.182 **	.217 **
2. 経済的安定性	-.100 *	-.150 **	-.174 **	-.224 **	-.012	-.027
3. 自立性	.301 **	.187 **	.292 **	.230 **	.189 **	.249 **
4. 身体的活動	.123 **	.072	.084	.165 **	.070	.116 *
5. 対人志向性	.123 **	.034	.010	.015	.072	.058
6. 愛他性	.197 **	.157 **	.168 **	.100 *	.227 **	.246 **
7. 社会的評価	.169 **	.027	.105 *	-.032	.077	.008
8. 家庭生活	.045	.014	.017	-.031	.103 *	.106 *
9. 学歴尊重	.050	-.081	-.012	-.154 **	.159 **	.076
10. 健康性	.069	.025	-.035	-.050	.001	.025

** : $p < .01$ * : $p < .05$

表8 価値観と自我同一性の関係(女子大学生 N = 572)

価値観尺度	自我同一性尺度					
	職業領域		価値領域		学業領域	
	探索	傾倒	探索	傾倒	探索	傾倒
1. 自己成長性	.334 **	.183 **	.370 **	.228 **	.170 **	.165 **
2. 経済的安定性	.033	-.092 *	-.117 **	-.120 **	-.027	-.085
3. 自立性	.306 **	.178 **	.291 **	.204 **	.140 **	.179 **
4. 身体的活動	.191 **	.103 *	.115 **	.149 **	.041	.086
5. 対人志向性	.057	-.026	.042	.002	-.013	.014
6. 愛他性	.237 **	.165 **	.178 **	.095 *	.174 **	.138 **
7. 社会的評価	.168 **	.065	.110 *	.024	.104 *	.033
8. 家庭生活	.035	.038	.016	.118 **	.013	-.039
9. 学歴尊重	.061	.029	-.030	-.032	.032	-.051
10. 健康性	.068	.043	-.059	.000	-.078	-.019

** : $p < .01$ * : $p < .05$

価とは正の相関が示された。また、「傾倒」は、II. 経済的安定性と負の相関が見られた。さらに、価値領域の「探索」は、II. 経済的安定性と負の相関が、VII. 社会的評価と正の相関があり、「傾倒」は、II. 経済的安定性、IX. 学歴尊重と負の相関が、IV. 身体的活動と正の相関が見られた。学業領域の「探索」は、VIII. 家庭生活およびIX. 学歴尊重と正の相関が、「傾倒」はIV. 身体的活動、VIII. 家庭生活と正の相関が見いだされた。

さらに、結果について詳細に検討してみる。

男子学生のもつ価値観のうち「人間的成長」に関わる尺度および「対人関係」のうちの愛他性は、自己同一性の3領域における探索、傾倒の両面に重要な役割をはたしているものと言える。さらに、職業領域の探索については、愛他性に加えて「対人関係」の因子の身体的活動、対人志向性、社会的評価にも関連が見られるが、傾倒については、「対人関係」における愛他性以外の価値とは、関連がみいだされなかった。価値領域については、「人間的成長」および「対人関係」の愛他性、社会的評価が重要な意味をもっていることが明らかになった。傾倒については、経済的安定性および学歴尊重を重要な価値とみなさない点が探索と異なる点である。学業領域では、探索においては「人間的成長」の因子および愛他性、家庭生活、学歴尊重を重要な価値としてもっているが、傾倒については、「人間的成長」の因子および「対人関係」因子の中の身体的活動、愛他性、家庭生活を重要な価値とみなしていた。これらの結果から、男子学生の自我同一性の形成にはいずれの領域においても「人間的成長」に関わる価値観および「愛他性」は重要な意味をもっており、各領域ともに探索と傾倒においては当然ではあるが、

関連をもつ価値観に相違が見られた。

女子学生については、職業領域、価値領域、学業領域の探索、傾倒のいずれにおいても「人間的成長」の因子を構成するⅠ.自己成長性、Ⅲ.自立性および「対人関係」の因子に属するⅥ.愛他性とは高い相関が示された。職業領域の探索については、さらに「対人関係」因子に属する身体的活動、社会的評価とも関連が見られ、傾倒については身体的活動と正の相関が、経済的安定性とは負の相関が見られた。価値領域の探索については、身体的活動および社会的評価と正の相関が見られ、経済的安定性とは負の相関が示され、傾倒では、身体的活動および家庭生活と正の相関が見られ、経済的安定性とは負の相関が見られた。学業領域における探索では、上述の価値に加えて社会的評価とも正の関連が見られ、経済的安定性とは負の相関が見られた。学業領域の探索については、社会的評価が加わり、探索には、社会的評価に正の相関が見られた。傾倒については、総括的にみたとおりである。これら女子学生の結果を詳細に検討すると、「人間的成長」に関する価値観と「対人関係」に属する愛他性は、自我同一性の形成にとっていずれの領域についても重要な意味をもつが、職業領域については、探索中は「対人関係」におけるいくつかの価値観を重要と考えているが、傾倒すると身体的活動のみが重要な価値観とみなされ、職業を考える上で必要と思われる経済的安定性は逆に重要な価値観とはみなされないことが明らかになった。価値領域については、探索では社会的評価に価値がおかれていたのが、傾倒すると家庭生活に価値をおくようになっている。また、学業領域においては、探索、傾倒ともに、「人間的成長」にかかわる価値が重要な意味を持っているのみであった。

自我同一性と価値観との関連で、男女ともに「人間的成長」に関する価値観および「対人関係」における愛他性を重視することについては、自我同一性地位の3領域いずれとの関連においても、また、探索、傾倒どちらの側面であろうともまったく同じであった。

また、経済的安定性が、女子のみならず男子学生においても職業領域、価値領域ともに重視されていないことは、これから未来の生き方を模索し、決定する際には生活の現実的な側面よりも、むしろ、自分自身の人間性形成に関わることのほうを優先しているということである。この結果は、現代青年の生活展望のあり方を示していると言えるが、対象とした大学生の大半が1年生であり、調査実施の期間も大学入学間もない時期であったため、大学へ進学するというそれまでの大きな目標をクリアした直後であるのが、1年生の心理的状态であり、大学卒業以後の生活設計、あるいは卒業以後の生き方への展望はこれから形成されていくものであろうと思われる。また、男女とも、身体的活動は自我同一性のいくつかの側面と関連づけられている価値観であるのに対して、健康性はどの側面ともまったく関連づけられていないことも非常に特徴的な結果である。この点については、運動やスポーツをしたり、体力を増進するというような身体的活動は青年たちにとって価値あることと考えられているが、健康にかんしては、

大部分の学生は現在健康であるためにその重要性には思いがいたらないものと思われる。

男女の差異について、詳細に考察してみることにする。

自我同一性の職業領域について性差がみられる価値観の側面は、対人志向性を男子は探索においては重視するのに対して女子は関連させていないこと、および身体的活動について女子は傾倒と関連づけているのに対して男子は探索とのみ関わりをもたせていることである。この意味するところについては、今後、さらに別の側面からの検討を行わないと現状では考察はしがたい。

価値観について自我同一性の価値領域で性差が示されたのは、探索では身体的活動が女子にのみ重視されているのに対して傾倒では男女ともに重視していること、および傾倒においては男子は学歴尊重を重視しないのに対して、女子は家庭生活を重視することである。その他の価値観の関連は性差はみられなかった。この結果は人生観における男女の考え方の違いを如実に示していると言える。すなわち、男子は人生観については、人間的成長が重要な意味をもち、経済的安定性および学歴尊重といういわゆる現在の一般社会では一見重視されると思われる価値観はむしろ重視していないことが示されている。それに対して女子では、人間的成長に関する価値観が重視されていることは先述のとおり男子と同様であるが、さらに未来への人生設計を考える時家庭生活が関連づけられて考えられていることは、結婚観における性差の表れであるといえる。

学業領域で見られた性差は、男子は探索において家庭生活および学歴尊重を重視しているのに対して、女子は社会的評価を重視すること、および傾倒においては男子は身体的活動と家庭生活を重視しているのに対して、女子は人間的成長に関する価値と愛他性のみであることである。すなわち、男子大学生にとって大学を卒業するというものの意味には将来の他者から受けるであろう評価が含まれているのに対して女子にはそのような意味合いがまったく示されていない。

これらの検討から、価値観と自我同一性形成との関係について概観的に考察した結果から、使用された価値観尺度は本来 14・5 歳から 25 歳までとかなり広い範囲の年齢のしかも多様な生活背景をもつ青年に適用されることを意図して作成されたものであることから、対象が大学生のみである本研究においては大学生の自我同一性に関連する価値観がどのようなものであるかは、むしろ明確になったといえよう。

(4) 価値観と自我同一性地位との関係について

(2) で述べたように、自我同一性地位について 4 群に分類された被検者間ではどのような違いが価値観に見られるかについて検討してみよう。

表 9 は、男子学生について、自我同一性の領域毎に 4 つの自我同一性地位と価値観との関係

青年期の価値観に関する研究

表 9 自我同一性地位と価値観との関係 (男子大学生 N = 491)

表 9-1 職業領域について

価値観尺度	達成 (N=153)		モラトリアム (N=112)		早期完了 (N=51)		拡散 (N=175)		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 自己成長性	21.52	(2.24)	21.33	(2.32)	19.78	(2.72)	19.81	(2.68)	17.82 **
2. 経済的安定性	16.81	(4.11)	18.12	(3.67)	17.53	(3.85)	17.84	(3.93)	2.89 *
3. 自立性	20.56	(2.23)	20.36	(2.73)	19.49	(2.75)	19.00	(2.67)	11.96 **
4. 身体的活動	17.52	(3.75)	17.90	(3.62)	17.08	(3.54)	16.67	(3.29)	3.16 *
5. 対人志向性	18.31	(3.34)	18.75	(3.19)	17.75	(3.43)	17.79	(3.32)	2.25
6. 愛他性	17.24	(3.96)	16.46	(4.09)	16.08	(4.44)	15.59	(3.73)	4.78 **
7. 社会的評価	16.07	(4.56)	16.77	(3.95)	15.10	(4.76)	15.16	(3.93)	3.93 **
8. 家庭生活	16.00	(5.13)	16.82	(4.75)	16.55	(4.38)	15.86	(4.36)	1.14
9. 学歴尊重	11.82	(4.43)	13.12	(4.42)	11.84	(5.12)	12.03	(4.39)	2.10
10. 健康性	20.37	(3.50)	20.79	(3.08)	19.27	(3.73)	19.71	(3.50)	3.50 *

** : $p < .01$ * : $p < .05$

表 9-2 価値領域について

価値観尺度	達成 (N=141)		モラトリアム (N=129)		早期完了 (N=95)		拡散 (N=219)		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 自己成長性	21.68	(2.25)	21.29	(2.17)	20.28	(2.40)	19.25	(2.81)	26.30 **
2. 経済的安定性	16.61	(4.38)	17.67	(3.66)	17.25	(3.68)	18.70	(3.64)	6.62 **
3. 自立性	20.79	(2.38)	19.94	(2.57)	19.81	(2.55)	18.72	(2.69)	14.55 **
4. 身体的活動	17.49	(3.83)	17.16	(3.44)	18.05	(3.25)	16.50	(3.49)	3.73 *
5. 対人志向性	17.82	(3.46)	18.26	(3.23)	18.87	(3.32)	17.94	(3.20)	2.17
6. 愛他性	17.04	(4.34)	16.44	(3.58)	16.53	(4.11)	15.37	(3.81)	4.03 **
7. 社会的評価	15.90	(4.85)	16.10	(4.27)	15.42	(3.81)	15.67	(3.90)	0.52
8. 家庭生活	15.65	(5.23)	16.71	(4.16)	16.84	(4.59)	15.79	(4.63)	2.05
9. 学歴尊重	11.32	(4.60)	13.26	(4.42)	12.17	(4.34)	12.10	(4.42)	4.23 **
10. 健康性	19.88	(3.62)	20.22	(3.47)	20.54	(3.17)	19.97	(3.48)	0.79

** : $p < .01$ * : $p < .05$

を検討するために分散分析をした結果である。

まず、職業領域においては、「人間的成長」因子に属する自己成長性、自立性および「対人関係」の因子のうち対人志向性を除く 3 尺度すなわち身体的活動、愛他性、健康性と「社会的評価」に関する経済的安定性、社会的評価に有意差が示された。平均値の多重比較は行っていないが、数値によって 4 つの自我同一性地位の価値観との関係について詳しく検討してみよう。

表9-3 学業領域について

価値観尺度	達成 (N=184)		モラトリアム (N=258)		早期完了 (N=91)		拡散 (N=229)		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 自己成長性	21.22	(2.30)	20.76	(2.64)	20.85	(2.27)	19.84	(2.93)	7.99 **
2. 経済的安定性	17.44	(4.00)	17.75	(3.66)	17.57	(3.42)	17.57	(4.35)	0.12
3. 自立性	20.33	(2.29)	19.92	(2.67)	20.34	(2.22)	18.84	(3.05)	10.30 **
4. 身体的活動	17.41	(3.47)	17.21	(3.23)	17.76	(3.49)	16.76	(3.87)	1.63
5. 対人志向性	18.25	(3.03)	18.57	(3.36)	18.23	(3.36)	17.81	(3.63)	0.95
6. 愛他性	17.50	(3.55)	16.32	(3.94)	16.37	(3.89)	14.86	(4.23)	12.15 **
7. 社会的評価	16.24	(4.37)	15.67	(4.02)	15.33	(4.20)	15.60	(4.30)	1.15
8. 家庭生活	17.03	(4.24)	15.58	(4.63)	15.79	(5.17)	15.69	(4.90)	3.13 *
9. 学歴尊重	12.79	(4.23)	12.57	(4.21)	11.30	(3.99)	11.79	(5.18)	2.86 *
10. 健康性	20.29	(3.47)	20.04	(3.12)	20.47	(3.38)	19.71	(3.66)	1.13

** : $p < .01$ * : $p < .05$

「人間的成長」に関わる2つの価値観では、「達成」地位の平均値がもっとも高く、ついで「モラトリアム」地位である。3番目は自己成長性では「拡散」であるのに対して、自立性では「早期完了」であった。「対人関係」に属する価値観のうち、愛他性は「人間的成長」の価値観と同様に「達成」「モラトリアム」「早期完了」「拡散」の順であるが、身体的活動、健康性および「社会的評価」の2つの価値観では、「モラトリアム」が「達成」地位より高い平均値を示している。また、身体的活動は「拡散」がもっとも低い平均値であったが、「対人関係」の健康性および「社会的評価」の経済的安定性と社会的評価では「早期完了」のほうが低い平均値であった。この結果から、職業領域では、「人間的成長」および愛他性では「達成」地位がもっとも高い平均値を示したことから、この3価値観は探索、傾倒ともに重要な意味をもっているものと言える。また、「対人関係」「社会的評価」において有意差がみられた4つの価値観についても有意差はみられなかったが、愛他性を除く他の3つの価値観において「モラトリアム」のほうが「達成」よりも高い平均値を示したことは、傾倒よりはむしろ探索に重要な意味を持っていると言える。経済的安定性、社会的評価、健康性の3価値観については、「早期完了」が「拡散」よりも低い平均値を示したということは、自分自身で悩んだり迷ったりすることなく職業について決定している場合、実際生活での社会・経済的な側面についての思慮に欠けているものと思われる。

価値領域について見ると、自己成長性、自立性、愛他性については「達成」地位群の平均値がもっとも高く、4群間に有意差が認められた。さらに、経済的安定性では「拡散」群がもっとも高く、身体的活動では「早期完了」群が、学歴尊重では「モラトリアム」群がもっとも高い平均値を示し、4群間に有意差が見られた。これらの結果から、「人間的成長」の価値観お

よび他者援助（愛他性）は、探索の末に傾倒し、自分自身の生き方に対して明確な自己投入をするために重要な意味をもった価値観であるといえる。それに対して経済的安定性は自分自身の生き方や自分の人生において何が大切であるかと言うような問題についてあまり考えた経験がないものは重要な価値観であるとみなが、自分の生き方、人生観について自己投入できたものにとってはあまり重要な価値観とはみなされなくなるものと思われる。これからの生き方についていろいろと考え、悩んでいる「モラトリアム」の状態では学歴尊重は高い価値観であると考えられているが、自己の生き方、人生観について自分なりに明確な考えが確立すると、学歴尊重は重要な価値観とは考えられなくなる。

学業領域において、同一性地位の4群間に有意な差がみられたのは、自己成長性、自立性、愛他性の3価値観のみであった。この3つの価値観ともに「達成」地位群がもっとも高い平均値であり、「早期完了」「モラトリアム」「拡散」の順に低くなっていた。しかも、この4群の人数比を併せて考えると、この結果は、学業について自己投入を明確にするためには、人間的成長に関わる価値観が重要な意味をもっており、そのような価値観を重要とみなしていないことは、大学生という一種の確定されたはずの社会的な身分でありながら、学業について悩んだり迷っており、大学での自分の専攻について確立できた考えをもつに至っていない状態にあるものと言える。本来、1年生からそれぞれの学部学科に所属しているのであるから、自分の専攻については当然自己決定がなされているはずであるが、そのような自己決定がなされないままに進学したものも多くいるものと言える。

つぎに、女子の結果について検討していく（表10）。

自我同一性地位の職業領域において4群間に有意差が見られた価値観は、自己成長性、自立性、身体的活動、愛他性、社会的評価の5つであり、いずれの価値観についても、「達成」地位群がもっとも高い平均値を示していた。また、社会的評価を除いては、順に「モラトリアム」「早期完了」「拡散」と平均値が低くなり、社会的評価については「モラトリアム」「拡散」「早期完了」の順であった。これらの結果から、女子大学生は自分の職業に対する自己投入を明確におこなうことができるためには、人間として成長することについての望ましい意味づけができるとともに、「対人関係」においても自分から報酬を考慮しない働きかけの重要性を認めることが、必要であるといえよう。

価値領域について4群間に有意差が認められた価値観は、自己成長性、経済的安定性、自立性、身体的活動、愛他性である。この価値観のうちで、自己成長性、自立性、身体的活動、愛他性の4価値観では、「達成」がもっとも高い平均値を示し、「拡散」がもっとも低い平均値を示し、経済的安定性についてのみ、逆に「拡散」がもっとも高い平均値であり、「達成」がもっとも低い平均値であった。これらの結果から、自分自身の人生について確固とした信念をもつためには、「人間的成長」及び「対人関係」の中でも他者への援助に関する価値観の重要

表 10 自我同一性地位と価値観との関係 (女子大学生 N = 572)

表 10-1 職業領域について

価値観尺度	達成 (N=191)		モラトリアム (N=293)		早期完了 (N=115)		拡散 (N=182)		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 自己成長性	21.67	(1.91)	21.37	(2.01)	20.72	(2.37)	20.13	(2.43)	17.34 **
2. 経済的安定性	17.68	(3.38)	17.55	(2.96)	16.73	(3.39)	17.80	(2.86)	2.45
3. 自立性	20.80	(2.05)	20.55	(2.21)	19.52	(2.31)	19.34	(2.20)	17.83 **
4. 身体的活動	17.02	(3.19)	16.91	(3.59)	16.58	(3.19)	15.79	(3.00)	5.35 **
5. 対人志向性	18.14	(2.98)	18.08	(2.89)	17.30	(2.76)	19.77	(2.97)	1.74
6. 愛他性	17.66	(3.50)	16.83	(3.22)	16.28	(3.31)	15.97	(2.94)	9.28 **
7. 社会的評価	16.30	(3.24)	15.93	(3.31)	15.05	(3.47)	15.64	(2.95)	3.35 *
8. 家庭生活	16.46	(4.91)	15.98	(4.98)	16.14	(4.19)	16.07	(4.19)	0.32
9. 学歴尊重	12.97	(4.27)	12.65	(3.70)	12.40	(3.76)	13.12	(3.65)	0.82
10. 健康性	20.28	(3.23)	20.18	(3.35)	20.15	(3.07)	19.82	(3.03)	0.72

** : $p < .01$ * : $p < .05$

表 10-2 価値領域について

価値観尺度	達成 (N=144)		モラトリアム (N=157)		早期完了 (N=82)		拡散 (N=269)		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 自己成長性	22.08	(1.66)	21.09	(2.10)	20.46	(2.46)	20.02	(2.30)	28.41 **
2. 経済的安定性	16.66	(3.29)	17.44	(3.41)	17.82	(2.98)	17.81	(2.80)	4.23 **
3. 自立性	21.03	(2.08)	20.27	(2.17)	19.77	(2.33)	19.31	(2.16)	18.04 **
4. 身体的活動	17.27	(3.40)	16.31	(3.05)	16.68	(3.78)	16.07	(2.93)	4.13 **
5. 対人志向性	17.72	(3.37)	17.79	(2.96)	18.51	(2.67)	18.03	(2.64)	1.51
6. 愛他性	17.40	(3.75)	16.87	(3.29)	16.44	(3.06)	16.36	(2.99)	3.54 *
7. 社会的評価	15.88	(3.34)	16.15	(3.26)	16.04	(3.30)	15.42	(3.02)	1.66
8. 家庭生活	16.85	(4.85)	15.55	(4.77)	16.48	(4.68)	16.11	(4.09)	2.16
9. 学歴尊重	12.35	(4.12)	12.92	(4.12)	13.22	(4.13)	13.08	(3.37)	1.25
10. 健康性	19.99	(3.45)	19.97	(3.22)	19.94	(3.19)	20.33	(2.86)	0.54

** : $p < .01$ * : $p < .05$

性を認識しえていることが必要であり、経済的安定性は逆にそうした自分自身の生き方についてあまり何も考えていない場合に重要なものと考えられている。さらに、自我同一性の価値領域においては、「人間的成長」およびいくつかの「対人関係」に関する価値観の重要性をみとめることが、傾倒とともに探索においても必要なことであるといえる。

学業領域においては、自己成長性、自立性、愛他性の3価値観において自我同一性地位の4

表 10-3 学業領域について

価値観尺度	達成 (N=177)		モラトリアム (N=98)		早期完了 (N=115)		拡散 (N=182)		F 値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1. 自己成長性	21.43	(2.08)	21.21	(2.21)	20.78	(2.50)	20.47	(2.25)	6.05 **
2. 経済的安定性	17.11	(3.21)	17.36	(3.31)	17.18	(3.19)	17.90	(2.95)	2.20
3. 自立性	20.51	(2.10)	20.16	(2.21)	20.09	(2.47)	19.59	(2.23)	5.11 **
4. 身体的活動	16.91	(3.09)	16.18	(3.43)	16.48	(3.59)	16.36	(3.04)	1.35
5. 対人志向性	17.84	(3.02)	17.82	(2.90)	18.01	(3.03)	18.10	(2.81)	0.33
6. 愛他性	17.42	(3.14)	16.72	(3.26)	16.65	(3.74)	16.14	(3.11)	4.53 **
7. 社会的評価	16.01	(3.27)	16.06	(3.07)	15.81	(3.30)	15.54	(3.19)	0.84
8. 家庭生活	16.18	(4.51)	16.17	(4.94)	15.79	(4.69)	16.48	(4.39)	0.53
9. 学歴尊重	12.84	(3.87)	13.24	(4.21)	12.62	(3.75)	12.87	(3.85)	0.46
10. 健康性	20.08	(3.12)	19.87	(3.26)	20.06	(3.45)	20.23	(2.96)	0.29

** : $p < .01$

群間の平均値に有意差が見られた。平均値についてみると、3つの価値観ともに、順に「達成」「モラトリアム」「早期完了」「拡散」と低くなっていた。つまり、学業に関しては、人間的な成長を重要視することおよび他者に対しての援助が自分のいま取り組んでいる学業について自己投入を明確にできるために必要であり、また探索にも傾倒にも必要であると言える。

自我同一性地位と価値観との関連について、男女の違いはどのようなものがあるのだろうか。

職業領域については、男子では経済的安定性と健康性についても4群間に有意な平均値の差が示されていたのに対して、女子にはかかる差はみられなかった。これらの結果から職業について、男子は経済的安定性および健康性と言う価値観が探索においては重要な意味を付与されているのに対して、傾倒には重要な意味をもたないが、女子では職業領域にはこの2つの価値観はまったく関連性をもたせていないものと言える。男女ともに「人間的成長」および愛他性、社会的評価を重視していることには違いはみられなかった。

価値領域について、男女での一番の相違は、男子には学歴尊重に有意差がみられたのに対して、女子では見られなかったことである。また、自己成長性、経済的安定性、自立性、身体的活動、愛他性は男女とも自我同一性地位の4群間に有意差が見られたが、男子と女子では価値観と自我同一性地位との関連の仕方に大きな相違が見られ、単に上述の価値観が青年の自我同一性に重要であるとのみいうことはできない。特に、女子ではこれらの価値観が自我同一性形成に同じような関わり方をしているのに対して、男子大学生については、これらの価値観の自我同一性形成との関わりが一樣ではないことも、青年期における価値観の複雑な様相の一端を示しているものといえよう。

学業領域については、男子で家庭生活と学歴尊重の価値観に4群間に有意な差が示されたのに対して、女子にはこの2つの価値観に差が示されなかったことがもっとも顕著な性差である。さらに加えて、女子の家庭生活および学歴尊重には、数値的にみて他の価値観に比べて4群間にほとんど差が見られないことも注目に値する結果である。自己成長性、自立性、愛他性の3つの価値観に4群間で差が見られた点は、男女に共通に示された結果であった。男子にとっては学業についての意味には単に自分の人間的成長だけでなく、これからの競争的な社会生活を少しでも上手におくる上での条件と考えられているのに対して、女子では結婚による家庭生活はほとんどの学生にとっては当然のこととして受けとめられており、そのために自我同一性の形成との関係はあまり見られないのではないかと考えられる。

IV. 総括的討議

本研究では、価値観尺度を新たに作成し、現代の大学生の価値観と自我同一性の形成状態との関係について、新価値観尺度を使用して検討してきた。

これらの結果から、自我同一性地位の職業領域と学業領域は、探索・傾倒ともに平均値が女子の方が有意に高いことがまず明らかにされた。これは、この20余年の間に女子の大学進学率は驚異的に増加したが、それでもまだ4年制大学への進学は短期大学への進学に比べれば女子にとって社会的な圧力がかかり、男子に比較してより自己決定の必要があるといえる。これは就職状況においてより顕著な現象として表れる。'60年代にいわれた女子大学生亡国論ほどには過激でないにしても、4年制大学卒業の女子は採用しないと公言する企業が少なくないという現状であり、そのような社会状況の中で進学を決定するにはそれなりに考えた結果のあらわれであるといえよう。

価値観と自我同一性の関連でもっとも特徴的な結果は、男子女子ともに一致して自我同一性地位の3領域の探索および傾倒と価値観の自己成長性、自立性、愛他性との間に有意な相関が見い出されたことである。また、経済的安定性は女子のみならず男子においても自我同一性の職業領域、価値領域と負の相関が見られた。その他の価値観と自我同一性地位における探索と傾倒との間には男女でそれぞれ別個に関連が見られたが、現代青年は、自己の生き方について、悩んだり苦しんだりしながら探し求めていく過程においても、また自己投入ができ、自己のあり方・生き方についての決定がなされた場合にも、生活における現実的な価値観よりも人間的な成長に関連する価値観の方が重要な関わりをもっているものといえる。

さらに、個人の自我同一性の達成状況（自我同一性地位）については、「拡散」地位にある者の人数比が他の3領域よりも相対的に大きく、特に男子の学業領域と女子の価値領域に顕著であった。男女ともにどの領域においても「達成」地位の人数比は3割以下であり、「早期完了」

が男女ともに小さい人数比であることも特徴的であった。自我同一性を提唱した Erikson の理論によると、青年期後期にあたる大学生においてこの結果に示されたように「達成」地位よりも「拡散」地位の方が大幅に多いということは、むしろ、自我同一性確立の危機状況にあるとも見られるが、「拡散」には自我同一性の未分化な状態と危機的な状態とが考えられており、本研究の被検者の場合はむしろ未分化な状態ではないかと推測される。現代青年の自我発達については、種々の側面から検討が行われているが、自我発達に限らず人格形成の諸側面において、いままで見られてきた発達の様相とはかなり異なる様相を呈するようになっていることが報告されている。本研究の結果もその反映とも考えられる。

自我同一性地位と価値観との関連について検討した結果から、「人間の成長」に関する2つの価値観および愛他性は男女ともに3領域で「達成」地位がもっとも高い平均値を示しているが、男子の職業領域を除いては健康性に自我同一性地位による差が見られないこと、経済的安定性は有意な差が見られる場合にも「拡散」あるいは「モラトリウム」で高い平均値が示されていることなど、男女大学生であるが故に特徴的と思われる結果を示している。

これらの結果は、今後、さらに被検者層を拡大することや縦断的に自我同一性の発達過程にそって自我同一性と価値観との関連がどのように変化し、それにとまって自我同一性の確立がなされるのかについて検討するとともに、人格形成に関連する他の要因との関連からも検討していくことが必要である。

文 献 — 覧

- Bem, S. L., 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 42, 155 - 162.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (I) — 研究方法に関する文献展望 — 追手門学院大学文学部紀要 23 1 - 17.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1990 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (IV) 一性役割尺度再考 — 追手門学院大学文学部紀要 24 39 - 48.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1993 価値観測定の研究と方法についての文献展望 追手門学院大学文学部紀要 27 1 - 19.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹・島 久洋 1994 現代青年の価値観について現代青年の行動様式と価値観 平成4, 5年度科学研究費補助金研究成果報告書 (総合研究 A・課題番号 04301010 研究代表者 秋葉英則) Pp. 125 - 157.
- Macia, J. E., 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 551 - 558.
- Macia, J. E., Waterman, A. S., Matteson, D. S., Archer, S. L. & Orlofsky, J. L. 1933 *Ego-Identity A Handbook for Psychosocial Research*, New York: Springer-Verlag.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (II) — 自我同一性地位および性役割の測定 — 追手門学院大学文学部紀要 23 19 - 36.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1990 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (III) 一性

井 上 知 子・三 川 俊 樹・芳 田 茂 樹

- 役割および自我同一性地位との関連― 追手門学院大学文学部紀要 24 23-37.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1991 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究（Ⅴ）―性
役割および自我同一性地位と役割受容・充実感の関連― 25 51-67.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1993 新価値観尺度の開発 追手門学院大学文学部紀要 28 35-
48.
- 芳田茂樹・井上知子・三川俊樹 1993 青年期の性役割形成と自我同一性地位および自我機能との関連
大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録 13 24-42.

1994年9月30日 受理